

保育者養成課程における音楽教育方法に関する研究 —コロナ禍における「児童音楽Ⅰ」の授業を中心に—

神原雅之 (児童学科教授) 岡林典子 (児童学科教授) 石田純子 (本学非常勤講師) 井上まゆみ (本学非常勤講師) 奥戸雅子 (本学非常勤講師)
谷 善子 (本学非常勤講師) 富岡順子 (本学非常勤講師) 丹羽ひとみ (本学非常勤講師) 稗方攝子 (本学非常勤講師) 山本浩美 (本学非常勤講師)

2020年度の大学授業は、コロナ感染拡大によって対面授業ができない状況となった。音楽授業も例外ではなく、その実施方法について模索した。本稿では、「児童音楽Ⅰ」の授業の取り組みを報告し、コロナ禍における音楽授業の現状と課題について検討した。「児童音楽Ⅰ」では3つの内容（弾き歌い、歌唱、音楽理論）を扱った。そこで筆者らは、オンラインによる指導を試みた。また、弾き歌いの練習に対して主体的な取り組みを促すためにポイント制を導入した。授業アンケートの結果から、総じて学生は能動的に授業に取り組んだ。一方、課題の提出とそのフィードバックなど、学生及び教員いずれも負担感が大きかったこともわかった。多様な音楽経験をもつ学生が学習を継続していく環境作りが重要であることが再認識された。

キーワード コロナ禍, オンライン, 音楽実技, 弾き歌い, 主体性

はじめに

2020年1月頃から流行し始めた新型コロナウイルス感染症の影響により、多くの大学がその対策に翻弄されている。京都女子大学でも2020年度前期の対面授業は全面的にオンラインで実施され、筆者らは慣れないオンライン授業とその対応に追われた。コロナ感染拡大の状況に応じて「緊急事態宣言」等が発出され、その都度、授業実施の方法について見直しを迫られることになった¹⁾。

筆者らは、音楽実技を伴う授業を担当しており、とりわけ歌唱活動や密な状態での指導は感染リスクが高いと見做された。このように、対面授業が困難な状況の中で歌唱や弾き歌いなどの指導をどのように行えばよいのか、その対応に苦慮した。本稿では、コロナ禍に揺れた2020年度前期及び2021年度前期に筆者らが担当した「児童音楽Ⅰ」（第3 Semesterに開講、必修科目）で試行錯誤した状況を報告し、今後の課題を明らかにしたい。

1. 本学児童学科の音楽教育と「児童音楽Ⅰ」の位置づけ

本学児童学科における音楽関係の授業は、4年間の大学生活において学生が乳幼児の音楽的成長に寄り添うことが出来るような学びを得ることを目指して、必修科目と選択科目を合わせて、1年次から4年次までに複数の科目が配置されている。表1に音楽関係の授業構成を示す。

「児童音楽Ⅰ」（表1の★印）は、必修科目として2年次の3 Semesterに位置づけられ、保育者として必要な音楽に関する基礎的知識と音楽技術の獲得を目指している。後述するが、本学学生の音楽能力は、ピアノを一例にとれば履修未経験者からある程度弾ける者までさまざまである。ゆえにこの授業では音楽能力の異なる学生一人ひとりの要望に応えられるような内容を整備することが求められている。

2. 「児童音楽Ⅰ」の概要

この授業は、保育者として幼児と共に音楽参

加するための音楽的基礎能力を高めることを目指している（必修科目）。従来、この授業は次のように実施されてきた。

2019年度の取り組み：コロナ感染拡大の前

「児童音楽Ⅰ」は、2コマ連続（90分×2コマ＝180分）で開講しており、次の3つの内容を含み授業を展開してきた。つまり、①弾き歌い（レパートリーの拡大と表現力の向上）、②歌唱活動、③音楽理論の基礎知識（楽典）である（いずれも対面授業で実施）。履修学生数は概ね100名である。そこで履修学生を3つのグループ（A、B、Cの3グループ）に分け、180分を60分ずつの3つの時間帯に区切り、各グループをローテーションして3つの内容（弾き歌い、歌唱、音楽理論）を学ぶように展開した（表2参照）。この授業を担当した教員は10名であった。

表1 本学児童学科の音楽関係授業

セメスター	授業科目
1	「児童表現学」（必修）， 「ピアノ・ベーシック A」（選択）
2	「幼児と表現」（必修）， 「ピアノ・ベーシック B」（選択）
3	「児童音楽Ⅰ」（必修）★
4	「保育内容演習（表現）」（必修）
5	「音楽表現演習Ⅰ」（選択）， 「音楽遊び」（選択）
6	「音楽表現演習Ⅱ」（選択）， 「児童音楽Ⅱ」（選択）
7	「音楽表現演習Ⅲ」（選択）
8	「音楽表現演習Ⅳ」（選択）

表2 3つのグループの授業ローテーション

グループ	Aグループ	Bグループ	Cグループ
学生番号	1～37	38～75	76～111
14:45～	音楽理論（楽典） （教員1名で担当）	歌唱活動 （教員1名で担当）	弾き歌い （教員8名で担当）
15:50～	弾き歌い （教員8名で担当）	音楽理論（楽典） （教員1名で担当）	歌唱活動 （教員1名で担当）
16:55～	歌唱活動 （教員1名で担当）	弾き歌い （教員8名で担当）	音楽理論（楽典） （教員1名で担当）

初回の授業：全15回の授業の内、初回はオリエンテーションを行った。ここでは授業展開の方法について説明し、複数の資料を配布した。配布物は、①楽曲一覧表、②レパートリーシート、そして③テキストの確認を行った。

- ① 楽曲一覧表：楽曲一覧には、各楽曲を演奏するための難易度を目安にしたポイントを記載した。学生には、この一覧表を手掛かりにして、自分の能力に応じて楽曲を自由に選択するように求めた（表3参照）。
- ② レパートリーシート：学生の練習の軌跡を残すために、本授業のために作成した「レパートリーシート」を学生に配布した。学生には、毎週の授業に向けてどの楽曲に取り組んだか、このレパートリーシートに楽

曲名を記入するように求めた（表4参照）。

- ③ テキスト：弾き歌いの練習のために2冊のテキストを用いた。一つは、『改訂 幼児のための音楽教育』（教育芸術社発行）、もう一つは『子どものうた弾き歌いベスト50』（音楽之友社発行）である。楽曲数は、それぞれ107曲、55曲、合わせて162曲が収められている。

弾き歌い練習のポイント：オリエンテーションの際には、弾き歌いを練習するときのポイントについても話した。つまり、①歌詞を明瞭に語るように歌う、②音楽の流れを止めない、③歌が浮き立つように、歌唱とピアノのバランスに留意することを告げ、弾き歌いのレパートリーを多く持つように促した。

歌唱活動：発声や歌唱の体験を通して、歌う喜びを味わい、表現力を高めることを目指した。

音楽理論（楽典）：音楽の基礎的知識を習得することにより、弾き歌いの楽曲分析や表現力向上の一助となることを目指した。

中間発表と最終発表会：授業の8回目と15回目には、弾き歌いの発表会を設けた。ここでは一人ひとりの練習成果をクラスの仲間に披露する機会とした。8回目の中間発表では2

曲を演奏した。これまで練習した楽曲から学生自身が3曲を選択し、事前に提出した。その内1曲は学生自身が演奏したい楽曲を、残りの2曲から当日教員が1曲を指定した。15回目の授業は最終発表会とした。実施方法は中間発表と同じであるが、弾き歌いを演奏する前に、幼児向けの言葉かけを含む「導入部分」を設け演じるように求めた。

表3 楽曲一覧とポイント

Page	『改訂 幼児のための音楽教育』	G.P.
31	チューリップ 作曲：井上武士 作詞：近藤宮子／日本教育音楽協会	3
32	ちょうちょう 作曲：ドイツ民謡 作詞：野村秋足	4
33	春がきた 文部省唱歌 作曲：岡野貞一 作詞：高野辰之	4
34	めだかの学校 作曲：中田喜直作詞：茶木 滋	5
35	おはようのうた 作曲：河村光陽 作詞：田中忠正	3
36	朝のうた 作曲：本多鉄磨 作詞：増子とし	3

(以下省略)

表4 学生に配布したレパトリーシート

2021年度【児童音楽I】レパトリーシート			
[学籍番号]		[氏名]	
回	期日	楽曲名	Grade Point
1	4月13日	オリエンテーション	
		・グループ分けについて	
		・テキストについて	
		・練習の仕方ほか	
2	4月20日		
3	4月27日		

(中略)

- ① レパトリーシートに、学籍番号、氏名を記入してください。
- ② 「レパトリー候補楽曲一覧」から任意の楽曲を選び、事前に練習してレッスンに臨んでください。
- ③ 中間発表、最終発表では、当日「演奏した曲名」を記入してください。
- ④ エクセルファイルを用いて、この表を作成することができます。
- ⑤ 最終発表会（15回目）のときに、「レパトリーシート」を提出してください。
- ⑥ 全15回の授業を通して、30ポイント以上を目指してください。

3. コロナ禍の試行錯誤：2020～2021年度 の取り組み

3-1 2020年度オンライン授業の取り組み

コロナ感染以前は、前述した通り「弾き歌い」「歌唱活動」「楽典」を対面で実施してきた。しかし、2020年1月頃から全国各地でコロナ感染の拡大が報じられ、卒業式や入学式も対面で実施できない状況となった。当然、対面での授業は実施できず、オンラインでの授業実施を迫られることになった。そこで10名の担当教員で協議し、次のように実施することにした。

- ① 3密にならないように、集団での対面授業を避け、オンラインによるレッスンを行う。
- ② 弾き歌いは、学生個々に練習することとし、その成果を毎週動画にて授業数日前までに提出するように求める。授業はその提出された動画についてオンラインで（動画を共有して）視聴し、助言を行う。
- ③ 歌唱活動（グルプレッスン）には、他者の演奏を聴くことで得られる学びが少なくないが、飛沫感染のリスクが高いため断念することにした。その代わりに、歌唱教材について課題を提示し、提出するように求める。歌唱指導は弾き歌いの個別指導内容に含んで実施する。
- ④ 楽典は、オンライン上に教材及び課題を提示し、その課題に各自取り組み、わからない点などはポータルに提出されたレポートに返答する。
- ⑤ 1教員あたりの学生数は10～11名とする。

以上のような方法で取り組んだ。次に、2020年度の授業終了後に実施した学生アンケートのコメントをみてみよう（自由記述から抜粋）。

3-2 2020年度の授業アンケートに見られた 学生の感想

学生の自由記述によるコメントをみてみると、オンラインでのレッスンに概ね好感をもって取り組んでいたことがわかった。コメントの一例をみてみよう（表5）。

表5 オンライン授業の感想

- ・他のグループは個人レッスンのようだったが、この授業はグループでやる方がよかったですと思います。自分が練習した曲だけでなく、みんなが練習した曲のアドバイスも同時に聞くことができてよかったです。
- ・毎週弾き歌いを提出するのは大変だったけれど、自分の中でだいぶ弾き歌いにも慣れてきた感じがするので、とてもためになる授業でした。
- ・対面授業で学びたかった。直接会えない状況でも毎回フィードバックをしてくださり、沢山褒めてくださったので、弾き語りに対するモチベーションがあがった。
- ・私のような音楽の基礎知識の少ない初心者でもわかりやすく親身になって指導してくださったのでとても良かった。
- ・毎回「zoomの授業で困っていることや難しく感じることはないですか？」と声をかけ、質問しやすい環境をつくってくださったたり、質問の解決策を教えてくださいましたりしてとても嬉しかった。
- ・対面でないので直接指導を受けることができなかつたことがとても残念でした。これからもピアノの練習を続けて今よりも上手に弾けるようになりたい。
- ・学生の状態を理解して授業をしてくださったので、負担感が軽減された。
- ・動画を撮ることで、普段は見ない自分の姿や声を聞けて、自分で改善点などを知ることができてよかったです。
- ・撮影した動画をアップロードするのは、何度も弾いたうちの一番上手にできたものを提出できるので良かった。
- ・ピアノのレッスンではオンラインならではの音割れや時差があったが、先生の熱意を感じたため受講は苦でなかった。
- ・もっと実践的な授業にするにはオンラインよりも対面が向いていると感じた。

この中で印象的なことは、学生はオンラインよりも対面による授業を望んでいる点である。そうした気持ちを抱きながらも、オンラインによる授業では積極的に課題に取り組んでいる。もう一つは、教員によるフィードバックである。教員は様々な状況に置かれている学生に細やかにフィードバックを行った。それに対する学生の感謝の気持ちが読み取られる。その一例を次

に掲げてみたい(表6)。

表6 教員のフィードバックに対する感想

- ・対面授業ができない中、個人に対する丁寧なフィードバックがありとても勉強になりました。
- ・zoomで個別に指導してもらえたので、自分に合った歌い方や弾き方を教えてくださり、質問もしやすかった。
- ・曲紹介のレポートはとても丁寧に添削をしていただき、フィードバックを読むことが毎回の楽しみになっていました。オンラインでもとても丁寧に教えていただいたのですが、実技の授業ということもあり、やはり対面での指導をいただけることが一番だなと痛感しました。
- ・弾き歌いの曲に導入のセリフを付けるのは大変だったが、子どもに伝わるような話し方を考えるようになりました。実習に直結する内容だったので良かった。

次に、ネガティブなコメントもみてみたい(表7)。

表7 オンライン授業における不満点

- ・ピアノが無かったので、話を聞いているだけでZOOMをしている意味は正直わからなかった。オンラインでするなら課題だけでも十分に感じた。
- ・このような環境下ではしょうがないことだと思いますが、楽器の準備やカメラ設定の難しさ、機器のトラブル(先生の誤操作?)などを考えるとオンラインでの受講は大変でした。
- ・オンライン授業の中でもしっかりさまざまなことを学べた。途中で調整されましたが、前半は特に課題量が多く、どの授業よりも大変でした。

これを見ても、オンラインによる弾き歌いレッスンへの不満、オンライン環境の整備や操作に関する不満、課題が過多であったことへの不満などが述べられていた。これらの指摘は、次年度の授業改善にどのように活かしていくか我々の課題として残された。

3-3 2021年度の取り組み

2021年度もコロナ感染の拡大は衰えず、

(2021年4月時点で)第4波の感染拡大が懸念された。特に、音楽活動における飛沫感染リスクが高いとされ、その対策に神経を遣った。感染リスクを回避するためにどのように授業を行ったらよいか、教員間で足並みが乱れないように、緊密に連携をとるようにした。

筆者らは「児童音楽Ⅰ」の授業の実施について、2020年度に試行錯誤して行ったオンライン授業の内容と、授業アンケートによる学生の自由記述をもとにして頻繁にオンラインで協議を重ね、2021年度の授業方法について次のように実施することにした。

- ① 課題への負担感が大きいと感じられているので課題内容を見直す
- ② 楽典は、音楽理論担当の教員がオンライン上に課題を示し、学生が取り組んだその内容についてはピアノ担当者が確認し、コメントをフィードバックする
- ③ ピアノ履修経験の無い学生、自宅やアパートなどにピアノ練習環境が整っていない学生などを考慮して、弾き歌いのレポートリーポイントを2020年度「60ポイント以上」としていたのを「30ポイント以上」とし、全員が30ポイント以上をクリアできるように設定することにした。
- ④ 歌唱活動は飛沫感染のリスクが高いため2021年度は実施しないこととした。

さて、2021年度当初、本学は全面的にオンラインによる授業でスタートした。コロナ感染の状況は日々変化していった。授業の方法はその状況に応じて柔軟に対応するように努めた。6月中旬には緊急事態宣言が解除され、少人数による対面授業も可能となった。本授業では、この時期から少人数による対面レッスンを行うようにした(なお、コロナ感染のリスクを強く感じる学生は申し出るように周知し、その学生には個別に対応した)。楽典についてはオンライン(オンデマンド)で教材及び課題を提示し、その提出を求めた。弾き歌いは、毎週、授業数日前までに動画の提出を求め、授業ではその動画をオンラインで共有し、アドバイスをを行った。コロナ感染に対する基本的対策:対面授業では

3密（密接，密集，密閉）を回避する対策を講じた。レッスン室に滞在している学生数を制限した（時差による集合時刻を設定した）。マスク着用，鍵盤に触れる前後の手指消毒を徹底するようにした。飛沫感染を防ぐために，教室ドアを開放したり，大声での会話を控えたり，歌唱のときは人と人の距離を広くとるように留意した（幸いにもこの授業内での感染者はいなかった）。

動画の提出とオンラインによる双方向授業：コロナ感染が拡大した時期には，オンラインによる動画の提出を求めた。具体的には，学生は弾き歌いの練習を行い，各自それを動画に撮る。その動画を大学ポータルにアップロードするように求めた。学生の多くは自宅で，一部の学生は大学内のピアノ練習室で練習し，動画撮影を行い，提出した。授業は，その提出された動画をもとにZOOMを通じてアドバイスをを行った。

4. 学生の実態

上記のように「児童音楽Ⅰ」は試行錯誤しながら実施した。ここではその実態について明らかにするために受講学生を対象としてアンケート調査を実施した。

4-1 方法

時期：2021年7月25日～8月2日

対象：2021年度児童音楽Ⅰ履修者109名（回答者数84名，回収率77%）

方法：アンケート調査はポータル上で実施した。

4-2 結果と考察

以下，アンケート結果をみてみよう。

1) 学生の音楽経験

学生のピアノ履修経験について尋ねた。その結果は表5に示した通りである。

2) 弾き歌いの練習状況

履修学生の75%はピアノ履修を経験している。その内訳は図1の通りである。これを見ると，「ブルグミュラー程度」をピークに「ソナチネ以上」のピアノ経験者は全体の約30%で

設問1. この授業の受講前までに、あなたはピアノを履修した経験がありますか。

設問2. 1で「ある」と答えた方。次のどの程度まで学びましたか？

表8 設問1の回答

ピアノ経験	有	無
人数	63名	21名
割合 (%)	75%	25%

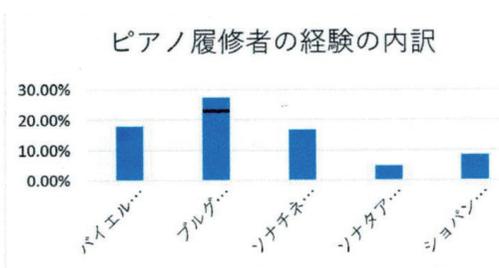


図1 設問2の回答

設問5. あなたはこの授業にどのように取り組みましたか。

表9 設問5の回答

取組の程度	ととも ←→ あまり				
	5	4	3	2	1
人数	41名	41名	2名	0名	0名
割合 (%)	48.81	48.81	2.38	0	0

設問4. この授業を受講するために、1週間におよそ何分くらいピアノの練習をしましたか。

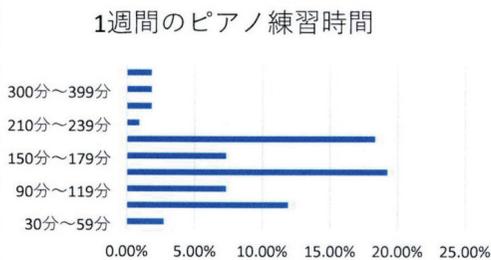


図2 設問4の回答

あった。ピアノ経験者の約70%は「バイエル」程度の初心者であることがわかる。

学生はこの授業にどの程度積極的に参加したのでしょうか。週あたりの練習時間を尋ねた。設問5では「とても頑張った」「頑張った」と回答した学生が97%と高い数値を示している(表6)。このことから、学生は積極的に授業に取り組んだことがわかる。ピアノの週あたりの練習時間は図2に示した通りである(練習時間の平均は144.4分)。「ピアノ履修経験なし」と答えた学生の練習時間平均は121分、「履修経験あり」の学生の平均は152分であり、経験者の方が練習を長く取る傾向が認められた。

3) ポイント制導入と学習意欲

ポイントの獲得状況についてみてみよう。

設問3. 「レポートシート」のポイント総数は何点でしたか?

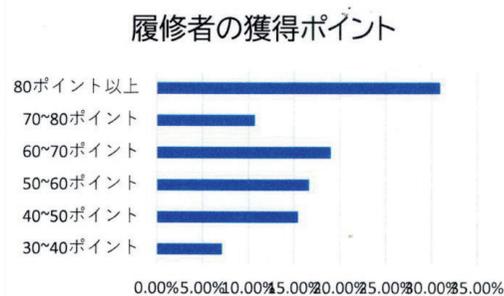


図3 履修者の獲得ポイント

ピアノ履修経験の無い学生を考慮して、授業初回のオリエンテーションにおいて、(レポートシートポイントを)30ポイント以上を目指すように促した。授業終了時点のポイントをみてみると、全員が30ポイントをクリアしている(図3)。ポイントの高い学生は、約3割の学生が80ポイント以上を取っていることから、学生は真摯に弾き歌いの練習に取り組んだ様子が見て取られる。

学生一人ひとりが能力の違いに応じて主体的に弾き歌いの練習に取り組めるようにポイント制を導入した。その結果、当初の目標30ポイントを大きく超えてポイントを重ねた学生が多いことに加えて、表8に示されているように

75%の学生が「とても役立った」「役立った」と答えており、ポイント制の導入は弾き歌いの動機づけにおいて一定以上の効果があったことが認められる。

設問6. ポイントを加算していくことは、弾き歌いの練習を行うための動機づけになりましたか。

表10 設問6の回答

取組の程度	とても役立った		あまり役立たなかった		
	5	4	3	2	1
人数	21名	42名	19名	1名	1名
割合 (%)	25.0	50.0	19.0	1.19	1.19

設問7. 弾き歌いの動画撮影は、弾き歌いを練習する動機づけに有益でしたか。

表11 設問7の回答

有益度	とても有益だった		あまり有益でなかった		
	5	4	3	2	1
人数	19名	40名	21名	3名	1名
割合 (%)	22.62	47.62	25.0	3.57	1.19

2) 動画提出の有用性

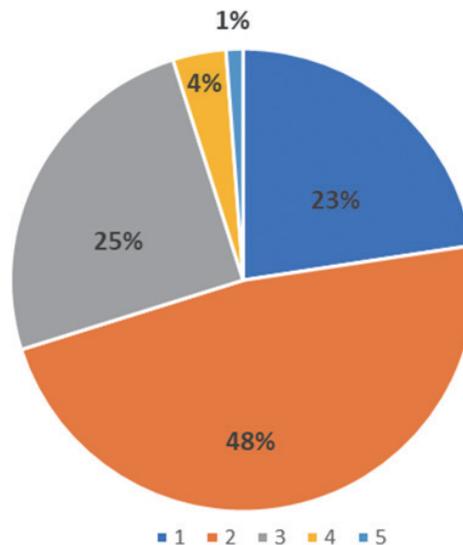


図4 動画提出の有益度

学生たちは動画の提出をどのように受け止めていたのだろうか。結果をみてみると、「とて

学生の努力に対して（教員が）共感的にかかわることで学生の意欲が喚起されたことがわかる。

対面授業の希望も多かった。2021年度の授業では、コロナの状況に応じてオンラインと対面の両方を体験することになった。それを振り返り、学生の多くが次のような思いを抱いた。「対面のほうが先生とピアノの雑談なども少しできたりするし、先生に見本を弾いてもらうことができる」「オンラインレッスンは音ズレがあったりして、弾きながらレッスンを受けるのが難しかった」と。

改善の要望も記されていた。その一つは「感染対策の甘さ」を指摘する声である。我々は細心の注意を払うように努めたのだが、更なる徹底が必要である。また、コロナ禍で「歌の授業がなくなり、楽典の授業がオンラインになったこと」を残念に思うという意見や「弾き歌いの曲につけられたポイントが合っていない」という指摘もみられた。いずれも早急な対応が求められている。

おわりに

2020年度の「児童音楽1」は、コロナ感染のリスクを回避するためにどのような対応が必要なのか手探りの状態から始まった。従来、対面による授業で展開してきたものをオンラインに置き換えることは、学生も教員も困惑した。いま振り返ってみて2020年度のオンラインによる実践は、学生も教員も負担感が過多であったということである。その点を踏まえて、2021年度の授業では、オンラインと感染リスクに対応した対面レッスンを織り交ぜることによって負担感の軽減に努めた。これらの取り組みにおいて、学生の主体的な取り組みを促すために、

ポイント制を導入したことには一定の効果がみられた。

2020年2021年度の取り組みを振り返ってみて、幾つかの気づきがあった。その一つは、多様な音楽能力を有する学生一人ひとりに適した内容を継続的に推進していくための工夫である。ここではポイント制を導入したが、これは一定の効果がみられた。二つ目は、課題の質と量の適切性である。学習過多は意欲の低下などを招いてしまう。そこでは、学習の目標を（音楽経験の有無にかかわらず）音楽とのかかわりを楽しいと感じられること、学生が自分の成長を実感し、主体的に学ぼうとする態度をはぐくむことが肝要になる。今後とも、多様な学生の学びに継続的に寄り添っていきたい。

註

- 1) 本学の小学校教員養成課程の学生を対象とした授業でも、筆者らと同じような課題に直面した。その様子は次の報告に詳しい。
宮内晴加、丹羽ひとみ、長谷川梨紗、野尻麻衣子、難波正明（2021）『学生の聴覚的働きを意識した取り組み：オンラインにおける教員養成課程のピアノ授業の可能性』、京都女子大学教職支援センター研究紀要（003）85-99

参考文献

- 神原雅之・鈴木恵律子（2018）『改訂幼児のための音楽教育』、教育芸術社
深見友紀子編著（2011）『子どものうた弾き歌いベスト50 注釈付き』、音楽之友社

付記：本稿で取り上げた授業「児童音楽I」は、執筆者全員で協議しながら取り組んだ。本稿の執筆にあたっては、神原・岡林が全体の構成および執筆を担当した。非常勤講師各位はアンケート調査の内容およびその結果に関する推敲を担当した。